

主日の福音 2026/1/18(No.1395)

## 年間第 2 主日 (ヨハネ 1:29-34)

霊が…天から降って…とどまるのを見た



ことわざに、「石の上にも三年」というのがありますよね。今日は、堅信組が大司教様から堅信を授けもらう日ですが、その前に、皆さんにも三年頑張った甲斐がありましたねとお祝い申し上げたいと思います。それは、詩編の愛読が、今日完了したからです。詩編 150 編を、皆さんは確かに読み終えたのです。

下五島地区、小教区として詩編を読み終えた教会があるでしょうか？たぶんないでしょう。個人としては詩編すべて読んだ人がいるかもしれませんが、小教区全体ではおそらくいないでしょう。本当にご苦労さまでした。そう思って皆さんの顔を眺めると、“霊”が降って、留まっている、そんな顔をしています。

堅信を受ける受堅者たちも、今日「“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまる」(1・32 参照)恵みにあずかります。それは、堅信を授ける司教様を通して、聖霊が授けられるからです。神の霊が、大司教様を通して授けられるので、私は堅信を受けた人たちを、大人の信者の仲間入りをしたと証言します。この人たちこそ、大人の信者の仲間入りをしたのだと証しします。

堅信式で、洗礼者ヨハネが見たような「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。」(1・32)は起こるのでしょうか。見えるか、触れるか、せめて感じられる。何かが起こるのでしょうか。

かつて大神学院にいた時に、一人の教授が叙階式の聖霊の恵みをこう表現しました。「叙階式で司教様の按手のあとに司祭全員の按手があるでしょう？あの時いつも感じるのは、炎のような舌が現れて弟子たちの上に降った、あの聖霊降臨の再現です。按手した手に、温かさを感じるのは、聖霊の働きがそこに有る証拠だと考えています。」

実はその教授は、誰よりも論理的にものを考える教授でした。感情に訴えて教えることは決してありませんでした。その教授が、「按手した時の温かさは、確かに聖霊の働きのおかげです」と言うのですから、聖霊が働く場面では、見えなくても、感じられる何かが起こっているのだと私も思います。

私は幸いに、堅信式の時、大司教様のいちばんそばにいます。聖香油を持ち、受堅者の堅信名を大司教様にお伝えしながら、堅信の秘跡をそばで見守っています。聖霊の働きによる変化は、その少し前から始まっているかもしれません。その少し前と言うと、「洗礼の約束の更新」「信仰宣言」「按手」のあたりからです。

リハーサルは木曜日に行いました。「洗礼の約束の更新」は「『退けますか』と問いかけられたら『退けます』と答えてくださいね」とお願いして練習させたのですが、ちょっと声が小さかった。しかし、いつも思うのですが、実際の堅信式の時になったら、「退けます」「信じま

す」と堂々と、しっかりした声で返事をしてくれます。

私はこのあたりから、たしかに聖霊の働きがあっているのだと感じています。リハーサルで出来なかったことが本番でできるというのはふつうありません。本番でできている。それはきっと、堅信の恵みをもたらす聖霊の働きが始まっているわけです。

今年、感心していることがあります。堅信の代父です。普通、こちらの小教区は堅信の代父を評議会議長、代母を女性部会長がお願いされていますが、受堅者がはっきりと、「この人をお願いしたい」と指名して代父を決めた受堅者がいたことです。関わりの深い人を代父母にお願いすることは大変ふさわしいことですが、「私は代父をこの人をお願いしたい」とはっきり申し出た受堅者には、すでにこの時点から聖霊が働き始めていたのかもしれませんが。

聖霊の働きは、イエス様が洗礼者ヨハネから洗礼を受けた時のような、目に見える働きでは無いかも知れません。しかし、「聖霊が働いているので無ければ考えられない」と思わせる出来事は今でも見られます。ですから堅信の恵みを注いでくださる聖霊は、今の時代の受堅者にも働いている。私はそう証言します。

6時のミサ、9時のミサに参加した皆さんの多くは、ひょっとしたら11時の堅信式のミサには参加しない、参加できないかもしれません。もし予定や都合を今からでも動かせるなら、堅信式のミサに参加して、自分自身の堅信式の頃を思い出してください。そして更に、今年の堅信式の中で、聖霊の働きがどこで見えたか感じられたか、確かめてほしいと思います。

年間第3主日(神のことばの主日)(マタイ 4:12-23)